

自分が尊敬するのは、先輩では藤田、
同輩では左内といった橋本左内に出会ったのは、
安政の大地震で藤田を失ったすぐ後のことであった。
当時、左内は西郷よりも七つも年下の二十二歳、
歳は若かったが、斉彬の政友松平春嶽の若き参謀として活躍していた有名人であった。

彼は日記の中で西郷をこう評した。

「薩芝上屋敷、御庭方、西郷吉兵衛、
卯年（安政二年）極月廿七日始めて
原宅（水戸の原田八兵衛宅）に於いて
相会す。燕趙非歌の士なり」

安政の大獄で廃れた若年の天才からは、
ただの「悲憤慷慨の徒」と見られている。

正義感、純粋さ、感受性という面からは
申し分のないスケールにあるのだが、
年下の切れ者左内から見ると、
年の割に純情すぎると映ったようである。
因みに左内の場合、
西郷と行動を共にするようになると
その評価をガラリと変えている。

さすがと言いたい。

又、ずっと後のことになるが、
西南戦争終結時、西郷の遺品から大切そうに
当時の橋本からの手紙がでたという。

この時期の西郷は、まだ若く青っぼいのだが、
斉彬の立場を考えると単なる立身のチャンスを
与えられたというより、
いきなり日本政府の表舞台に躍り出す、
という表現が的を得たような活躍をし出すのである。

当時、斉彬は一外様大名でしかない
薩摩藩のトップという立場にあるのだが
「自藩の安泰」などという小さな枠の中にいない。

**彼は日本の危機を強く自覚しており、
幕府開明派老中阿部正弘と謀り、
一橋慶喜を将軍とした公武合体
(幕府と朝廷が合同協力して政治を司る方式)により、
列強と対抗し得る「日本」の再構築を志向していた。**

慶喜を次期将軍とするためには、
幕閣における発言権を強め、
幕府人事に介入してゆかねばならない。

斉彬はその手段として、
養女敬子(後の天璋院)を将軍家定夫人として
大奥へ入奥させようと図った。

政略結婚である。

その折、西郷は斉彬の意を受けて婚姻の根回しの為、
朝廷を始め、水戸、越前等各藩を飛び廻っている。

自身は若年で身分も低かったが、
斉彬の直接の使者である。

錚々たる人物達が斉彬の代理西郷と、
五分五分の立場で会ってくれている。

この行動を通じて西郷の視野は一気に拡がり、
又、薩摩に西郷吉兵衛ありと、知名度もぐんと増していった。